

大学研究室紹介

『地域産業が生み出す風景と居場所』
～千葉大学・安森研の活動～

研究室紹介

千葉大学大学院 教授 安森 亮雄

千葉大学安森研究室は、2020年4月からスタートして現在3年目であり、その前身の宇都宮大学安森研究室（2009年～2020年）の11年間で発展させながら活動している。発足当初から「建築と都市の関係性」が中心的な関心であり、研究活動（リサーチ）による分析・体系化と、設計活動（デザイン）による実現・社会化という両側面を、相互にフィードバックさせながら活動している。

こうした関心のもと、主に3つのテーマを展開している。1つ目は、「都市の空地」であり、安森の大学院生時代から継続するテーマとして、建築と周囲をつなぐ“最小の都市空間”としての媒介空間を捉えるものである。2つ目は、「地域の素材と産業」で、宇都宮大学での大谷石（おおやいし）の調査から始まり、素材や職人の生業に遡ることで、「産業の連関」として建築と都市の形成を捉えようとしている。3つ目は、「大学キャンパス」である。キャンパスは、多くの建物や、学生・教員・地域住民を含めた人々が活動する“都市の縮図”とも言える空間であり、空地や素材というテーマとも関連しながら、校舎改修やキャンパス計画の実践も伴い展開している。

本稿では、特に「地域の素材と産業」についての展開を2つ紹介する。

まず、大谷石に始まる「石のまち」のフィールドワークである（図1）。元々、都内の東工大に在籍していたが、北関東の宇都宮大に赴任し、地域で産出される大谷石という素材に出会った。フランク・ロイド・ライト設計の旧帝国ホテル（1923年）に使われたことでも知られるこの石材は、市内では多くの石蔵や石塀に使われ、都市の風景の一部になるとともに、大谷町

には多くの石切場があり、現在でも採掘が続いている。こうした石蔵や町並みについて、市街地から農村部まで500棟以上を実地調査し、その活動は、地域のNPOや、建築士会、石材業者、市役所とも連携していった。同時に、宇都宮大のキャンパスでは、大谷石を活用した校舎改修や休憩所を設計した^{注1)}。

10年ほど調査を続けるうちに、徐々に日本各地で、大谷石と同様の凝灰岩が産出し石の建物がみられる都市を訪問して、交流するようになった。現在、日本の「石のまち」という視野で、石材というマテリアルがつなぐ産業・建築・町並みの連関と、まちづくりまでを視野に活動が続いている。千葉県にも房総半島（富津市金谷）に房州石という石があり、まちづくりの将来を一緒に考え始めている。これらの関東の石材は、主に東京・横浜の近代化に用いられたもので、産地と消費地の関係も含めた、地域素材についての探究である。

次に、地域産業における「ものづくりの空間」に関するフィールドワークである。石材産業もそのひとつであるが、地方都市や周辺市街地では、手工業による産業が息づいており、染物工場（宇都宮、浜松、大阪堺、東京江戸川区等）、酒蔵（栃木県）、製陶所（益子）などを対象に、ものづくりの空間の調査してきた。こうした工場の空間には、特有の魅力と活気があり、作業に適した空間の設けから、生産の様子が表出する都市の風景までが魅力的である。宇都宮では、宮染めのリサーチを市美術館と共同で行い、市民参加のコンペで新しい柄のパターンを開発し、その展覧会を宇

都宮大のキャンパスで開催して、会場デザインを行った^{注2)}。

千葉大学では、2021年4月に墨田サテライトキャンパスが開設され、そこを拠点として、デザイン・リサーチ・インスティテュート（dri）という分野横断の活動が始まっている。墨田区は、多くの町工場がある「ものづくりのまち」であり、研究室院生が履修する大学院スタジオで「町工場の世代と再生」をテーマにフィールドワークを始めている^{注3)}（図2）。区内には多くの業種があり、地域ごとに特徴があるため、昨年度は、北部（向島）の金属業、今年度は南部（本所）の繊維業や印刷業、さらに隅田川や荒川沿いの皮革業など、順次進めていく予定である。今年度からは、空き工場活用の共同研究もスタートした。



図2：墨田の町工場のリサーチ ©morinakayasuaki

これらのいずれのテーマにおいても、研究で分析や体系化するには、観察する建築（例えば、石蔵や町工場）の「型」＝タイプロジーを見出す手法をとっている。個別の事例や形を包含する「型」を見出すことで、その形の背景や条件を掘り下げ、さらに、次の創造へとつなげる媒介になる。20世紀的な空間構成の型に留まらず、素材の具体性や、時間軸、人々のアクティビ

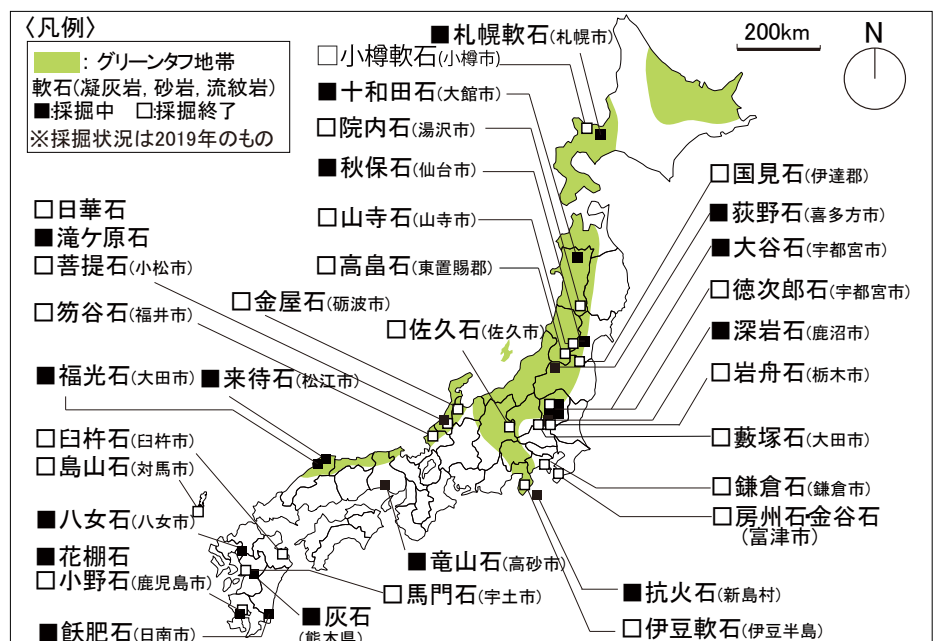


図1：石のまち（代表的な軟石の産地）

ディなどを含む、21世紀の「ポスト・タイポロジー」をあぶり出そうとしている。また、こうした先に、設計による実現・社会化があり、都市スケールの風景と、身体スケールの居場所の間に建築を位置づけることで、両者が同時に存在する新しい「風景と居場所」を創造したいと考えている。

注1) 震災がれき大谷石の再利用による休憩所
<https://www.g-mark.org/award/describe/40388>
注2) 地域産業とデザイン〜宮の注染を拓く〜
<https://www.g-mark.org/award/describe/44548>
注3) 千葉大学大学院建築デザインスタジオB
担当：安森亮雄+森中康彰(非常勤講師)

1. 石のまちなちのフィールドワーク

千葉大学大学院博士前期課程 附田 悠杜

私は、高校時代に地元の深さ 200m を超える採石場を見学したことがあった。その壮観な風景と人間の生業の歴史に感銘を受け、印象的な経験として心に残っていた。大学での卒業設計では鉱山を敷地とし産業遺構のあり方や活用について考えを深め、自分の興味も石のまちなちの研究に移った。

日本遺産大谷の設計競技

昨年、修士1年4名と安森先生で「日本遺産大谷の持続可能な地域づくり」をテーマとした設計競技(主催 日本建築学会関東支部)に参加し、最優秀賞を受賞した^{注4)}(図3)。大谷地区のフィールドワークを行い、採石産業の痕跡や未活用の場所の魅力を集め、大谷地区の更なる可能性を考えた。私たちは提案にあたり、大谷石の運搬に用いられた旧採石軌道と駅の跡、積出作業所、そして大谷地区の農地に点在するポンプ小屋に着目した。現在、大谷地区では主に西側が観光地となり、交通渋滞や歩行者の歩きにくさが問題となっている。それに対して、東側に位置する旧軌道を新たな交通ルートとして回遊動線を形成することで、面的に広がるエリアができると考えた。旧軌道に電気トロッキと自転車、歩行者の道を整備し、旧駅の再生(新たな交通拠点の整備)、積出作業所の再生(モノからヒトのリノベーション)、ポンプ小屋の活用(道の点景の整備)という3つのプロジェ



図3：日本遺産大谷の設計競技

クトを提案した。過去と未来、点在する場所をつなぐ「懐かしい未来の道」によって、新たな人の流れと場所性をつくりだす構想である。

東北の石のまちなちとこれから

修士論文として東北の「石のまちなち」の研究を開始し、昨年は、山形県の高畠石、福島県の国見石、宮城県の秋保石を調査した。国見町の旧小坂村産業組合石蔵の中で見た木組と国見石の壁の空間は、木の柔らかな風合いと石の荒々しくもどこか繊細な姿が重なりあって、惹きつけられた。この東北訪問は大雪に見舞われたが、農閑期の冬に石工は石を採っていたという話に、厳しい作業環境を肌で感じる思いだった。

これらの活動を通して、地域素材である石は、単なる建築資材ではなく、古代の地層から近代の産業を経て現代に至る歴史を含み、各地の風土に根差した地域性を持つ魅力的なものであると考えた。最近では老朽化や耐震性により石の建築が減少している現状があるので、石の建築や街並みの価値を伝え、今後のまちづくりに活かすためにもこの研究を深めていきたい。

注4) 日本建築学会関東支部 提案競技 第22回
<http://kanto.aj.or.jp/proposalcompetition>

2. ものづくりのまちなち・墨田のフィールドワーク

千葉大学大学院博士前期課程 村山 香菜子

私の祖母は、村で唯一の商店を自宅に併設する形で営んでいる。私は祖母の暮らし方やお店が担う役割の多義性に魅力を感じ、職住近接の建築や街に興味を持った。修士1年でもものづくりのまちなち・墨田におけるスタジオで職住共存の都市に視野を広げ、現在、町工場をテーマとした修士論文に取り組んでいる。

墨田の町工場の大学院スタジオ

「町工場の世代と再生—墨田の地域産業における職住共存の行方—」というテーマ



図4：町工場のカルテ

のもと、昔ながらの街並みが残る墨田区北部エリアをスタジオメンバーで手分けして、金属工場のフィールドワークを行った。観察を続ける中で、町工場には、建物内での共存(住むことと町工場を営むこと)と、地域との共存(騒音問題や敷地の狭さへの配慮)に対する工夫が、外観に多く表れていることがわかった。町工場のアイソメ図にそれらの工夫を書き込みながら、工場的情報をまとめた町工場カルテを作成し(図4)、町工場のタイポロジーを見出していった。さらに、各エリアの特徴をもとに町工場の建て替えや改修を提案した。

私は、京島と東向島エリアを担当した。長屋などの戦前の建物がそのまま残り、下町らしい風景が続いている。1階を工場、2階を住居とする家型をした小さな町工場が多く、住宅の中に工場を構えた第1世代(1950年代まで)のものが半分を占めていた。他の地域よりも敷地が小さいため、職と住を両立させるための小さな設いを纏っている。モデル提案では、小さな敷地を使って、リサーチで得られた設いの工夫を用いながら、ファブラボを中心とした町工場が存続するための拠点を設計した。

墨田リサーチの展開

スタジオの成果をブックレットにまとめるとともに、秋に開催された「すみだ向島EXPO2021」^{注5)}で旧町工場のスペースを使って展示し、地域の方々にスタジオの成果を共有した。この展示を通して私は、普段何気なく街に佇んでいる町工場のひとつひとつの共通点から抽出したタイポロジーが、都市や建築について議論し合う1つのきっかけになることを実感した。

さらに、墨田サテライトキャンパスに隣接する公園に新設される公衆トイレのコンペ(主催 UDC すみだ、共催 墨田区)に、私と研究室同期の2名で挑戦し、スタジオを通して捉えた墨田の小さな設いの特徴を踏まえたトイレの提案を行った^{注6)}。私たちは、最優秀賞を頂き、実施設計に参加しており、令和6年度に竣工予定である。

建物のタイポロジーや設いは街との接点であり、墨田という街並みを形作っている。今後の研究も含めて、町工場の特徴を踏まえて、変化する墨田という街でどんな風景を大切に残していくのか、議論を喚起できれば良いと考えている。

注5) すみだ向島EXPO2021 <https://sumidaexpo.com/>

注6) 大学のある街のトイレ 最終審査結果
https://udcsumida.jp/2021/09/23/compe_result/